



結〜消防・命のプロが見た 東日本大震災 3.11現場の事実×心の真実

会期：2018年2月6日(火)～4月22日(日)
会場：せんだい3.11メモリアル交流館

「結」—このタイトルは、仙台市消防局のレスキュー隊員が、東日本大震災後に初めて東北で行われた「第46回全国消防救助技術大会」(仙台・宮城大会)のスローガンとして考案したものです。消防救助の基本である結び(結案)や、全国から駆け付けてくれた関係者だけではなく、語り尽せない方々との結束や、支援への感謝が込められています。

これは、消防にとって特別な意味を持つ言葉に寄せる想いを、チラシ裏面のメッセージから抜粋したものです。

この企画展では、2011年の5月から7月に、津波被災現場の最前線に立った若林消防署の職員が無記名で書いた未公開の「手記」を中心に、隊員へのインタビュー、沿岸部救助活動等に使われた資機材のほか、発災時に非常時体制となった消防の活動記録を展示しました。手記は、不眠不休で職務を遂行する姿の内側に隠された、不安や葛藤を抱く一人ひとりの人間の姿を赤裸々に伝えるものでした。

きっかけは、「次の災害に備えることの大切さを伝えるものをメモリアル交流館でできないか」という、とても強い使命感と熱い想いを持った若林消防署予防係の皆さんとの出会いでした。

当初は、救助に使われた資機材をオブジェとして展示をすれば、リアルに伝わるのではないかと考えていました。しかし、ある日の消防署内での打ち合わせで、消防の〇さんが「一番伝えたいのは、手記です」と控えめにも断言した時、その場の誰もが納得し、手記を軸とする方向にシフトしていきました。



撮影：SkyStars.LLC



手記は60人分に絞り、10の章立てで流れをつくり、2018年1月に撮影した4人の消防職員の1時間を超えるインタビューを1人約10分×2本に編集。展示空間には、当時荒浜航空分署で被災したアルミボートを置き(10名以上の屈強な消防署職員のご協力により設置)、オブジェを最小限に留めることで、「心の真実」である手記に記された心情、インタビューで語られる想いを前面に出す内容にまわっていきました。

そして、展示室の壁面上部を絵の具で青空を描いた布製キャンバスで囲み、手記は、最終章タイトル「未来へ」に向かって構成(章ごとのタイトルパネルに描かれる空も次第に青空に)するなど、「展示を見に来てくれた人に、最後は明るい気持ちになって、希望を持って帰ってほしい」という、消防と展示製作に関わる皆の願いを、随所に散りばめました。タイトルの「結」は、製作チームと消防とが同じ山頂を目指す道しるべのようであったと思います。

開催期間中に7年目の3月11日を迎えたこの企画展を、一緒に創り、応援して下さったすべての方々、様々な想いを抱いて近隣、市内県内外から交流館に足をお運びいただいたみなさまに、この場を借りて心より感謝申し上げます。最後にまた、チラシ裏面メッセージから。

あの災害がなければ気づけなかった「何か」という空白に「結」の一文字が浮かびます。救助の現場で対峙していた命と命。そしてその生存を折っていた人の命。この三つの命の関係は、距離(世界規模)も、時間(心と痛み合わない)も、様々過ぎて、不安と割り切れない葛藤を抱えながら、自然の猛威のただ中を巡った、三角点のそれぞれでありました。無数のそれらの点こそ「結び目」なのではないでしょうか。

文：せんだい3.11メモリアル交流館 石川倫代

